

激動の世界で本を読む！ 仙台オヤジ編集者3人衆 おすすめ本ベストテン 2022 第13回

東北大学出版会 プレスアート 荒蝦夷
小林直之・川元茂・土方正志
【トークイベント】
**タピオ館立オープン大学「在仙編集者3人がしゃべりまくる
年末・年始におすすめの本2022年版」**
日時:2022年12月22日(木)19:00～20:00
場所:泉パークタウン タピオ南館1階
TEL.022-375-8808◎http://fm797.co.jp/tapidai/
FORUS古本市 仙台古本倶楽部
日時:2022年12月28日(水)18:00～20:00
場所:フォーラス7階特設会場
TEL.022-298-8455
入場無料・予約不要
出演/小林直之・川元茂・土方正志

2022年 冬

ソーシャルディスタンスを取りながら開催します

<p>東北大学出版会</p>
<p>人文社会科学の未来へ —東北大学文学部の実践—</p> <p>東北大学文学部 編</p> <p>A5判／並製本／3,300円（税込）</p>
<p>戦争の哲学 —自由・理念・講和—</p> <p>横地徳広 著</p> <p>A5判／並製本／3,960円（税込）</p>
<p>東北大学教養教育院叢書 大学と教養第5巻</p> <p>生死を考える</p> <p>東北大学教養教育院 編</p> <p>A5判／並製本／2,750円（税込）</p>
<p>〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内</p> <p>電話022-214-2777 FAX022-214-2778</p> <p>e-mail info@tups.jp URL https://www.tups.jp</p>

<p>巻頭特集</p> <p>鮓は人なり 受け継がれる技と、飽くなき探究心</p>  <p>新・宮城風土記 第12回 [多賀城市]</p> <p>仙台の編集者、記者、書店員etcが選んだ 2022年、今年の3冊</p> <p>好評連載 みやぎの食材 歴史紀行 菅野正道 第26回 [小豆] 小僧のころ～人生はすべて修行～ 塩沼亮潤 闊歩する日々～社の日記帖 佐伯一麦 121回 [皆既月食に思う]</p> <p>Kappo 仙台闊歩 1月号発売中 820円／オールカラー／112頁</p> <p>宮城県内の書店で買い求めください</p> <p>〒984-8516 仙台市若林区土樋103番地 TEL 022-266-0911 FAX 022-266-0913</p>
--

②『人はどこまで合理的か』(上下巻)／スチマーツ・ピツカー(樫明美訳)／草思社／各2,080円
3年前に読んだ『21世紀の啓蒙 理性・科学・ヒューマニズム・進歩』(上下巻)計10頁(1頁)で、すくすく「人間はなぜこんなに悪く、こんなに愚かなのか?」「理性に従う」ことは、カッコ悪いになりました。今回のテーマは「合理性」。『人間はなぜこんなに悪いのか?』(上下巻のオビ文より)と、私たちが普段の思考や判断のよりどころにしているものに疑問を投げかけます。自分の考え方がいかにフラクタルメタメタメイカケツクかを突き付けられ、そのたびに落ち込

①『直立二足歩行人類史 人間を生き残らせた出来の悪い足』／ジェミー・ツリウツワ(赤坂洋子訳)／文藝春秋／2,980円
「私にとっての万歩計アプリ、1日の目標設定を6000歩にしてスラム・身長・体重ではこの歩数が目安になるらしいのですが、今の生活スタイルで毎日ウリウリするのはなかなか難しく、なるべくちろんと時間を用意して歩くようにしています。歩いていてとんだん頭がきてきて、困っていたことの解決策を思い浮かべたり、書きかけの文章の決め手になるようなフレーズが頭に浮かんだり……。自分のそんな経験と重ね合わせながら本書を読むと、『はじめに』にある「二足歩行こそ、われわれを人間たらしめている固有の特徴の源だったのだ。二足歩行こそ人間の証明なのだ」という一文が深く響いてきます。生き生きとした筆致も魅力の素晴らしいサイエンス・ノンフィクションです。

【総評】今年の芸術鑑賞で印象に残ったのは、ある楽団が演奏した『鏡河鉄道999』です。ハーモニが美しく、疾走感があり、限りなく心から感謝です。河北新報にエッセー「とうほく本の散歩道」を連載中。セツタ一講師。時事通信等に文芸・ノンフィクション作品の書評を務局長。一般社団法人大学出版部協会理事。河北TBCカルチャー1972年、仙台市生まれ。明治大学文学部卒業。東北大学出版会事

小林直之(編集者／東北大学出版会)

みますけど、著者と実際に対話しているような錯覚を楽しみながらの読書は格別です。

③『サイレント・ブース 昆虫たちの「沈黙の春」』/ライヴ・ルソフ(藤原多加夫訳)／NHK出版／2,750円
ミッパチやブリの社会性に驚いたり感心したりする人がいますが、それはちょっと失礼なことかもしれません。地球は昆虫の惑星で、その種類も数も不明である生物種であるのが昆虫。トト属で現存する最も多産で最も数の多い生物種なのが昆虫。トト属で現存する必要性が変化してきた図書館の様子が映し出されます。同時にそれ本好きは、本がある場所が好き。となる。書店さんと同様に図書館も気になる存在です。本書は、タイトルのとおり日本における図書館の歴史がわかる本。イメージとしては、日本史の教科書から図

⑧『雷神と心が騒めるへんなタネ ことものためのケーム理論』／鎌田雄一郎/河出書房新社／1,793円
小小学6年生が主人公の児童書ですが、中身は経済学面白本です。小学6年生が主人公の児童書ですが、中身は経済学のように記されたかを紹介します。一見すると遠くにあること、安全保障や様々な学問分野に応用される理論です。物語は主人公の

⑦『清少納言がみていた宇宙と、わたしたちのみついている宇宙は同じなのか? 新しい博物館への招待』/池内了/青土社／1,980円
今年の秋にあった皆既月食。だんだん欠けていく月を見上げながら、ある芸術家の「原始人は、月食を見てどんなことを思っただろうね」というつぶやきを思い出しました。本書も、そのつぶやきを思い出す美に味わい深い本です。20年以上前の本が新版として生まれ変わりましたのですが、文学と科学が交わり合うところに生まれる豊か

本が出ましたが、中でも印象に残る一冊でした。一面を浮き彫りにします。今年は(も)図書館にかんする様々な

⑥『図書館の日本文化史』/高山正也/ちくま新書／1,012円
本好きな、本がある場所が好き。となる。書店さんと同様に図書館も気になる存在です。本書は、タイトルのとおり日本における図書館の歴史がわかる本。イメージとしては、日本史の教科書から図

深い両者の関係。いやあ、ホントに面白かったです！

いのか、そのイベントが見つかる一冊です。

⑩『専門家と』とは誰か』/村上陽一郎編/晶文社／1,980円
新型コロナウイルス感染症の拡大が始まった頃、「専門家」による見解が耳目を集めました。未知のウイルスに対抗するにあたり、専門家の言葉は唯一の頼りだったと思います。編者は「今日ほど、専門家、あるいは専門性ということの美態が問われる時期も稀である」と言いますが、振り返れば私たちは東日本大震災後からずっと「専門家」の知識に頼り続けていると言えるかもしれません。専門分野の高度な知識は危険を回避する手段となり得ますが、それを正しく用いて効果的に活かすことができるのは「専門家」にかざされ

⑨『アナー・ミスター・ツツククラツ』/C.A.ラーナー(高橋美子訳)／創元推理文庫／1,254円
「読書会」を舞台にしたコーズー・ミスターの傑作。一気読みする面白さです。アガサ・クリスタイ好きの雑誌編集者が主宰する「アナー・ミスター・ツツククラツ」に集まった個性的な面々、楽しい読書会にしたいと思います。一人のメンバーが方不明に。他のメンバーが半分けて調査を始めると、なにやら物騒なこと、厄介なこと、奇妙なことが次々と起こり、謎は深まるばかり…。ミスター好きが集まるクラブならではの推理と行動力が冴えわたり、いつの間にか読んでいる自分もこのクラブのメンバーに仲間入りしたような気持ちで真相を追いかけようになります。シリーズ第一作とのことで、次回作も楽しみます。

するのほきわめて珍しいことです。ぜひご注目ください。
賞賞の政治・経済部門を受賞しました。児童向けの本が本賞を受賞す。美はこの本、学術書の分野で最高の栄誉とされるサントリー学思議力を発揮し、相手の心を知ることで啓一は成長していきます。村として取り上げられます。正体不明の雷神がくれるヘんなタネが

滝沢啓一が近所の書店の万引き騒動に巻き込まれるところから始ま

<p>荒蝦夷の本 好評発売中</p>
<p>東日本大震災 遺族たちの終わらぬ旅 亡きわが子よ 悲傷もまた愛 寺島英弥[著] 悲しみの奥底に潜む世界をすくいあげ、次代に伝える。東日本大震災でわが子を失った親たちの声、11年の記録。 本体1800円+税 2022年3月刊</p>
<p>震災学 vol.16 東北学院大学発行 いとうせいこう/今村文彦/宇都彰浩/梶原さい子/黒木あるじ/玄侑宗久/杉尾宗紀/山川徹ほか【第5回仙台短編文学賞受賞作発表】 本体2000円+税 2022年3月刊</p>
<p>フェンシング・マエストロ 論創社発行 アルトゥーロ・ベレス＝レベルテ[著] 高城高[訳] 土方正志[編] 仙台が生んだ日本ハードボイルド界のレジェンドが、人気スペイン人作家の傑作長編を翻訳！ 19世紀末を舞台とした剣劇×歴史ロマン！ 本体3600円+税 2022年11月刊</p>
<p>仙台路地裏 <古本あらえみし> 絶賛営業中！</p>
<p>仙台駅にいちばん近い古本屋。東北ゆかりの作家から民俗・歴史、仙台・宮城の本、震災関連、ミステリ、幻想文学、写真集まで。充実の品ぞろえ！盛林堂ミステリ文庫やヒラヤマ探偵文庫にもご注目ください。</p> <p>平日・土日祝 12:00～19:00/水曜定休 〒983-0852 仙台市宮城野区榴岡 4-7-12 TEL & FAX 022-298-8455 仙台駅東口より徒歩5分、「テンザホテル・仙台ステーション」裏手。地下鉄宮城野通駅【北2出口】が便利です</p>
<p>(有) 荒蝦夷 http://araemishi.la.coccan.jp/ Twitter@araemishi</p>

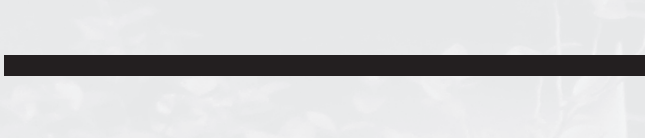
川元茂

（編集者／Kappo2代目編集長）

1967年、宮城県生まれ。プレスアート取締役。タウン情報全国ネットワーク理事。仙台短編文学賞実行委員会事務局長。仙台市文化事業団のweb『まちりよく』に「宮城の雑誌クロニクル」を連載中。今年はKappo 創刊 20周年の年で「東北の名店」「宮城の新しいチカラ」特集が好評でした。塩沼亮潤著『寄りそう心』、菅野正道編『伊達の国を飾った仙台門松』などの書籍を担当しました。

【総評】年齢も年齢なので自分の人生を総括するような読書が増えています。仕事がらみで1970年代の雑誌を収集したりもしています。既刊本ですが、以前小林さんが一位に選んだ『ブラッドランド』が衝撃でした。ウクライナも含めた暗黒のヨーロッパ史で、今必読の書でしょう。音楽は藤井風（いまさらですが）とBialystocksにはまり、仙台出身のジャズピアニスト片倉真由子のライブも良かったです。ドラマでは、ウィリアム・ギブスン原作の『ペリフェラル接続された未来』（アマブラ）がおすすめです。

①『**『ローリング・ストーン」の時代 サブカルチャー帝国をつくった男**』／**ジョー・ヘイガン（中島由華訳）／河出書房新社／7,260円**
ヤン・ウェナーという名前を遠い昔、どこかで聞いたことがあって、頭の片隅に残っていました。本書を読んだその疑問が解けました。ジョン・レノンがビートルズ解散の顛末に答えた有名なインタビューがありますが、彼はそのインタビュアーだったのです！掲載された雑誌は『ローリング・ストーン』の1971年1月号と2月号。ヤン・ウェナーは発行人兼編集人でした。創刊は1967年11月。その5か月前には『サージェント・ペーパーズ〜』がリリースされ、ロックを知的に分析する風潮が強まり、セックス、ドラッグ、ロックンロールという当時の若者カルチャーと相まって、『ローリング・ストーン』は瞬く間に部数を伸ばします（平均部数140万部）。読者は「ディランのすべての曲の歌詞を熟知し、ストーンズのすべてのスキャンダルを事細かに把握し、今日を生きぬく活力のためにビートルズの情報が必要とする」若者たち。著者はウェナーから500箱に及ぶ手紙や文書、写真を提供され、いくつかのプライベート以外は一切の制約なく書くことを前提に、アメリカ雑誌界の巨人の半生



土方正志

1962年、北海道ニセコ町生まれ。有限会社荒蝦夷代表取締役。著書に『ユージン・スミス 楽園へのあゆみ』（偕成社）、『日本のミラ仏をたずねて』（天夢人）、『瓦礫の風貌 阪神淡路大震災1995』（リトルモア）、『てつびん物語 阪神・淡路大震災 ある被災者の記録』（偕成社）、『瓦礫から本を生む』（河出文庫）など。河北新報誌書面で「仙台発出版こぼれ話」連載中。仙台駅東口すぐそばで〈古本あらえみし〉営業してます！

【総評】外国文学担当です。短編小説が好きです。もちろん大長編も好きなのですが、切れ味の鋭い短編には格別な味があります。今年のベストテンもその好みがフルスロットル、7冊が短編集となりました。7冊めて短編99本、短編小説の愉悅に浸る年末年始はいかがでしょうか。

①『**雨に打たれて アンネマリー・シュヴァルツェンバッハ作品集**』／**アンネマリー・シュヴァルツェンバッハ（酒寄進一訳）／書肆侃侃房／2,200円**
著者は1908年生まれのドイツ人女性。作家・写真家として活躍しますが、親ナチスの実業家だった両親に耐えられず中近東を放浪。第2次大戦中の1942年、交通事故死。享年34。そんな彼女の短編は、情熱と暴力と怒りを底に秘めながら声高になることなくひたすらに静謐です。ヨーロッパの野蛮に背を向けて、アラブの砂漠の静けさに彼女はなにを見たのか。戦間期のイスラム社会に迷い込んだ異邦人の異文化との衝突や擦れ違い、そして放浪のよるこびが小説のごとくエッセーのごとく。読者の胸に放浪者の孤独が響きます。

②『**その昔、N市では カシュニッツ短編傑作選**』／**マリー・ルイーゼ・カシュニッツ（酒寄進一訳）／東京創元社／2,200円**
これもまたドイツ人女性作家の短編集です。こちらは1901年生まれ、戦前に作家活動に入り、第2次大戦中は反ナチ「国内亡命者」として沈静しました。戦後短編を集めた本書とはいえば、幻想怪異の文学であり、あるいはメルヘンやSFの香りも漂わせたりと、いわゆる「奇妙な味」の作品集です。謎と不気味が描かれますが、解

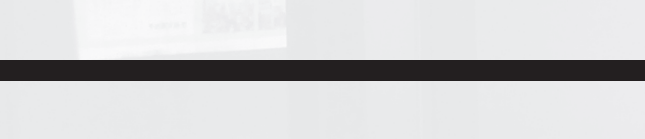
を描きました。雑誌がどうやって生まれ、何をエンジンにして続き、そして変わっていくのか、考えさせられる一冊です。

②『**Lee Ufan 李禹煥**』／**国立新美術館・兵庫県立美術館編／平凡社／3,630円**

日本の現代美術のひとつの潮流である〈もの派〉を代表するアーティスト・李禹煥。もの派は、石や木、鉄板などの“もの”を単体もしくは組み合わせる作品にする流派で、李禹煥は余白の芸術家とも呼ばれています。今年、国立新美術館で大規模な作品展が開かれました。本書は図録ですが、過去の作品が網羅的に収められている貴重な一冊です。彼の作品は絵画も彫刻も好きで、直島の美術館にも行きましたし、著作も読んでいます。抽象どころか、時に点ひとつで作品を創り上げ、アートの起源と超越を感じさせる稀有な方だと思います。展覧会の最後の展示は「関係項サイレンス」と題された石と空白のキャンパスだけで構成された作品で、何も描かれていないキャンパスを石が見るという不思議ですが、好きな作品でした。

③『**地図と拳**』／**小川哲／集英社／2,420円**
『ゲームの王国』でカンボジアの過去と未来を虚実交えて描ききった作者が次に選んだのは満州でした。「国家とはすなわち地図なり」。作中の言葉です。ウクライナ戦争を例に出すまでもなく、史実を振り返れば、国家は地図に記されてはじめて国家となり、そのためには拳（＝暴力）が必要であることは明白です。作者は「新しい国家づくりがなぜ失敗したのか」を書きたかったと語っています。日露戦争前夜から第2次大戦までの半世紀、満州の架空の都市（李家鎮）をめぐるって、日本軍の密偵に帯同した通訳、ロシア人の神父、不死の中国人、都市計画家らが入り乱れ、殺戮と策略が〈李家鎮〉を襲います。都市の誕生から消滅を描いた骨太の群像劇です。

④『**この父ありて 娘たちの歲月**』／**梯久美子／文藝春秋／1,980円**
修道女・渡辺和子さんと歌人・齋藤史さん。一人は2・26事件で暗殺された渡辺錠太郎教育総監の娘で、もう一人は叛乱を幫助した罪に問われた齋藤瀏陸軍少将の娘です。事件によって運命を変えられた二人の軍人とその娘の人生を丹念に描いた一章と二章が表裏一体となって胸に迫り、新幹線で感涙してしまいました。「父を憎み、



決されないまま読者を置き去りにします。不穏さがたまりません。「なんなんだ、これは」と読者を絶句させて終わります。ジャンルを超越するカテゴライズ不能の作家もまた私の大好き物、堪能しました。川元さんと被りました。

③『**兎の島**』／**エルピラ・ナバロ（宮崎真紀訳）/国書刊行会／3,520円**
オビに〈スパニッシュ・ホラーの旗手〉と紹介される女性作家の短編集なのですが、ホラーといってもいわゆるモダン・ホラーでもなければ、クラシック・テイストでもない、なんともシュールな「コワさ」です。読者を不穏に宙吊りにして深淵をのぞかせます。クセになりそうです。どうもこここのころラテン・アメリカも含めたスペイン語圏の作家に惹かれています。

④『**リャマサーレス短篇集**』／**フリオ・リャマサーレス（木村榮一訳）／河出書房新社／3,190円**
というわけで、こちらも大好きなスペイン作家リャマサーレスの短編集が出ました。『狼たちの月』（ヴィレッジ・ブックス）と『黄色い雨』（河出文庫）にヤラれて、トドメは短編集『無声映画のシーン』（ヴィレッジ・ブックス）でした。クールでダークなロマンティシズムにシビれます。スペインといえば、南欧地中海の〈明〉をイメージされるかもですが、そのカゲにひそむ〈冥〉と〈瞑〉にこそ私は惹かれます。これは『兎の島』にも共通する魅力です。

⑤『**オデッサの花嫁**』／**エドガルド・コサリンスキイ（飯島みどり訳）／インスクリプト／3,300円**
移民と亡命の文学です。アルゼンチンの作家コサリンスキイは、ロシアからの移民の裔、ボルヘスの助手を務めて映画作家として活躍、本格的に小説の筆を執ったのは還暦をすぎてからの由。収録作はヨーロッパと南米を舞台に、父祖の時代と現在とを繋ぎます。それぞれ独立した物語ながら、どこか紐帯めいたもので結ばれています。港町オデッサは私たちの世代ならフレデリック・フォーサイスの『オデッサ・ファイル』でしょうか。そのオデッサが今年はウクライナの「オデーサ」として世界の耳目を集めました。表題作「オデッサの花嫁」ではヨーロッパから南米大陸へと少女が船出します。短い物語に私たちが生きてた20世紀が拡がります。

父を愛し、娘たちは書いた」。本書の内容はこの帯のフレーズに尽きます。ほかに島尾ミホ、茨木のり子、田辺聖子、辺見じゅん、石牟礼道子などの“書く女”が登場します。

⑤『**その昔、N市では カシュニッツ短編傑作選**』／**マリー・ルイーゼ・カシュニッツ（酒寄進一訳）／東京創元社／2,200円**
奇妙な味わい。幻想怪奇短編。幽霊譚。心理劇……。当てはまるようできて、どれも当てはまらないのが、ドイツの女性作家・カシュニッツの魅力なのではないでしょうか。簡単にはカテゴライズできません。「白熊」「船の話」「長距離電話」「四月」など、収められた短編の題名はシンプルですが、物語は決して予想通りには進みません。詳しい話はしません。とにかく一読をおすすめします。まだ邦訳されていない作品があるそうなので、続編にも期待です。

⑥『**Nさんの机で ものをめぐる文学的自叙伝**』／**佐伯一麦／田畑書店／2,420円**
佐伯一麦さんの最新エッセー集です。仕事道具である机や筆記用具、パソコンからはじまり、旅のお供であるスーツケースやカメラ、コート。煙草や酒、コーヒーメーカーといった嗜好品、珍しいところでは電鍵（モルルス符号を出力する装置）やマネキンも登場します。“もの”を題材にしたエピソードは、過去と現在を行き来し、作家デビュー前夜の奮闘ぶりや文学者たちとの交流が瑞々しく描かれ、人間・佐伯一麦の苦闘が見えてきます。本書は紙の手触りに加えて、挿画の使い方や版面のバランス、シュルダーの入れ方など、編集者として見習うべき部分が多く、この書籍の装丁が“もの”としての存在感を発揮しており、その構造自体にも拍手を送ります。

⑦『**すべての月、すべての年 ルシア・ベルリン作品集**』／**ルシア・ベルリン（岸本佐知子訳）／講談社／2,640円**
2019年に『掃除婦のための手引き書』で話題になったルシア・ベルリン、待望の第2弾です。人を愛し、愛されながらも、孤独を友として生涯を過ごした女性作家の半自伝的な短篇集です。本作には人間味のある個性的なキャラクターがたくさん登場し、彼らを観察する作者の眼と形容するメタファーが秀逸です。冒頭の一文に引き込まれ、一瞬で作者と彼女を取り巻く人々の人生を覗き込み、揺さ



⑥『**彼女は水曜日に死んだ**』／**リチャード・ラング（吉野弘人訳）／東京創元社／2,310円**
こちらはCWA（英推理作家協会賞）受賞作を含む米作家の短編集です。CWA賞作家といえばミステリかと思われるでしょうが、いやいや。犯罪に絡む物語もありますが、実はそれはワキ筋だったりします。描かれるのはアメリカ社会の日常の「闇」でしょうか。苦いユーモアもあります。その向こうに私たちの社会も透けて見えて、アメリカ社会のリアルに私たちのリアルが被ります。ミステリよりもアメリカ小説の伝統を垣間見させる名品揃いの短編集です。

⑦『**すべての月、すべての年 ルシア・ベルリン作品集**』／**ルシア・ベルリン（岸本佐知子訳）／講談社／2,640円**
2019年に短編集『掃除婦のための手引き書』（講談社）が翻訳文壇の「事件」となった米作家の短編集第2弾です。これまた川元さんと被りましたので、内容紹介はそちらを。どうやら短編の趣味が合いそうなので、川元さんには他の5冊の短編集もおススメしておきたいと思います。

⑧『**時ありて**』／**イアン・マクドナルド（下楠昌哉訳）／早川書房／2,200円**
英作家の古本SFです。シリアスなファンタジーでもあります。古本ディーラーが偶然に手にした1冊の詩集が「時の扉」を開きます。その向こうに見えた世界は……これ以上はご紹介だけでネタバレしそうです。シリアスでありながらロマンティックでもあって、ジャック・フィニイの『ゲイルズバーグの春を愛す』や『夢の10セント銀貨』（共にハヤカワ文庫）や『フロム・タイム・トゥ・タイム 時の旅人』（角川文庫）などがお好きなら、きっと気に入られるはずです。昨年のベストに私が挙げたアマル・エル＝モフタルとマックス・グラッドストーンの『こうしてあなたたちは時間戦争に負ける』（早川書房）ともどこかシリアスに共鳴しています。英国SF協会賞受賞です。なにせ古本屋ですから、古本小説、好きです。

⑨『**キリンの首**』／**ユーディット・シャランスキー（細井直子訳）／河出書房新社／2,970円**
お気に入りの独女性作家シャランスキーです。『奇妙な孤島の物語

ぶられ突き放されて、そしてため息をついて、また頁をめくるという繰り返しです。癖になる作家です。

⑧『**翻訳、一期一会**』／**鴻巣友季子／左右社／1,980円**
翻訳問答シリーズ第3弾です。J.M.クッツェー『恥辱』やM.アドウッド『誓願』などの翻訳で知られる鴻巣友季子さんが、多彩なゲストを招いて翻訳談義を繰り広げます。今回は小説に留まらず、名曲の歌詞や古典文学をそれぞれが訳し、当日その解釈をめぐるって激論を戦わすという趣向で、横尾忠則さんとは、ポプ・ディラン『風に吹かれて』の歌詞の解釈を巡って問答が繰り広げられ、ダイヤモンドユカイさんとは、『ホテル・カリフォルニア』をテーマに「ソングライティングは、直接伝えることと曖昧にすることのせめぎ合いで行われている」という作詞術について語り合います。

⑨『**愛のぬけがら LIKE A GHOST I LEAVE YOU**』／**エドヴァルド・ムンク（原田マハ訳）／幻冬舎／1,870円**
『叫び』で知られる、ノルウェーを代表する画家ムンク。インパクトのある色彩とうねるような筆致で、内省的な作品を数多く残しました。死後、オスロ市には、油絵約1150点、版画約1万7800点、水彩画と素描約4500点、彫刻13点が残されたと言います。さらにムンクは生涯にわたって手紙や日記、文学スケッチ、詩など文章を書き続け、ムンク美術館には1万2000点以上の原稿が所蔵されています。本書は、中学3年生の頃、岡山の図書館でなにげなく手に取った〈マドンナ〉を見て衝撃を受け、アートの世界に足を踏み入れた作家の原田マハさんが、ムンクの肉声を翻訳しました。

⑩『**日本怪異妖怪事典 東北**』／**寺西政洋、佐々木剛一、佐藤卓、戦狐（朝里樹監修）／笠間書院／2,860円**
事典なので県別・50音順に怪異妖怪が1300種類以上。昔話や民話、言い伝え、郷土史、市誌町誌などから丹念に集められた妖怪やインターネット掲示板で近年語られた怪異も拾ってきているので、守備範囲は広いです（ちなみに仙台上空の未確認飛行物体も載っています）。巻末のインデックスが充実していて、50音順に加えて、部類別（例えば小豆や馬）と属性別（例えば異類婚姻や憑物）といった引き方もできます。膨大な参考文献から抽出された労作です。



私が行ったことのない、生涯行くこともないだろう50の島』（河出書房新社。今年、増補版が出ました）と『失われたいくつかの物の目録』（こちらも河出書房新社）が翻訳されています。この2冊はちょっと奇妙なエッセイ集、あるいはエッセイとも短編小説とも読める作品集でしたが、長編の本書はなんともご紹介が難しい。物語としては旧東独のちいさな町の学校が舞台です。ベテラン生物教師ローマルクは共産主義体制下に教師となり、東西統一後も教師を続けています。その彼女の日常が綴られます。どうやら統一ドイツに強烈な違和感があるようですが、それを背景にしながらも、物語はなんかへん、彼女の違和と孤独がそのまま独白じみた文体で読者に届けられます。日常に対比して生物学の知識が語られて、物語に解決もオチもありません。けれどもこの物語には「なにか」があって、読者はページから目が離せません。その「なにか」を読者にゆだねて、そこが本書の魅力とっていいのかもしれない。

⑩『**ジョン・ウォーターズの地獄のアメリカ横断ヒッチハイク**』／**ジョン・ウォーターズ（柳下毅一郎訳）/国書刊行会／2,860円**
アメリカにはハチャメチャなジャーナリストとかエッセイストの伝統があるようです。取材スタイルも文章のスタイルもハチャメチャ過激に破天荒、シリアスなテーマもしっかり押さえながら読者の腹の皮をよじらせます。たつぷりな毒気の裏側にしぶといロマンティシズムが隠れています。私のお気に入りとはたとえば『ヘルズエンジェルス』（リトル・モア）の〈ゴンゾー・ジャーナリスト〉ハンター・S・トンプスンとか『クール・クーール・LSD交感テスト』（太陽社）などの若き日のトム・ウルフですが、本書の著者である映画監督ジョン・ウォーターズもどうやらその系譜に連なります。怪物『ピンクフラミンゴ』の監督として知られるウォーターズが齢66にしてアメリカ横断ヒッチハイクに出かけます。前段はその旅で「起こりうるかぎり最高のこと」と同じく「最悪のこと」を想像したフィクション、後段は実際の旅の記録です。前段のハチャメチャぶりと後段のロード・ムービー風味が絶妙です。旅に出たくなります。ウォーターズ、今年は『厄介者のススメ ジョン・ウォーターズの贈る言葉』（フィルムアート社）も出ました。こちらも翻訳は柳下毅一郎さん。ほかに『悪趣味映画作法』（青土社）や『クランクポット』（徳間書店）があります。見かけられたらお試しを。